

入念に耕し土を軟らかく

——**鮫島 國親**



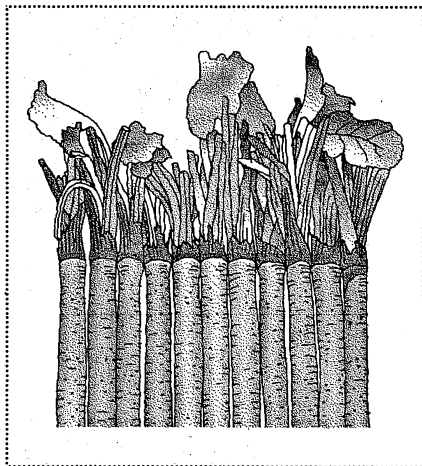
ゴボウは独特の香りと歯ざわりが好まれ、きんぴらゴボウや煮しめ、豚汁、あえ物などの食材として重宝されます。柔らかいうちは、さつとゆでサラダ感覚で食べるのもおいしいです。ミネラル分が多く、低カロリーで食物繊維が多いヘルシー野菜です。冬には地上部が枯れ上がり、春に再び芽を出して生育し、やがて花が咲きます。今回は春まき栽培を紹介します。

発芽適温、生育適温ともに20～25度で、耐暑性は強いですが、耐寒性は部位で異なり、地下部はマイナス20度にも耐えますが、地上部は霜にあうと枯れます。耕土が深く、肥沃で排水の良い畑が適しています。酸性土壌や連作は嫌います。最低2年間は休作し、キャベツ、ネギ、パレショなど他の作物と輪作しましょう。

種まき予定の2、3カ月前に1平方メートル当たり苦土石灰120グラムを畑全面に施し、2週間前に種まき位置を中心にスコップ等で幅20センチ、深さ10センチ程の溝を掘り、土を軟らかくして埋め戻します。

1週間前には化学肥料100グラム（三要素15%の場合）を目安として地表全面に施して入念に耕耘し、土をよく砕きます。未熟堆肥の施用や土塊、乾燥、古種の使用は岐根の原因となります。

種まき時期は、無マルチ栽培で3月下旬、マルチ栽培で3月上旬ごろです。霜による幼根の浮



き上がりや断根の危険性の少なくなる時期が望ましいです。種まきの前日までに深耕した部分を中心に高さ20センチ程度のうねを立て、十分にかん水しておきます。

栽植密度は、うね幅60センチ、株間10～15センチ、一条とし、一穴に2～4粒ずつまき、深さ1～2センチになるよう薄く覆土して軽く押さええます。なお、種子を一昼夜水に漬けてまくと発芽がよくそろいます。

間引きは本葉一枚時と三枚時に行います。また、生育初期はこまめに除草しましょう。発芽2カ月後および梅雨明け後に追肥（1回当たり20グラム）し、同時に中耕・土寄せを行います。

収穫期は無マルチ栽培で8～2月、マルチ栽培で7～8月です。

（鹿児島県農業開発総合センター副所長）

平成21年1月15日（木）／南日本新聞